

北海道 150 年道民検討会議 第 2 回北海道みらいワーキング 議事録

日時：平成 28 年 7 月 20（水）15:00～16:25

場所：第 2 水産ビル 4 階 4 F 会議室

【出席者】

< 委員 >

小磯委員【座長】、大津委員、河崎委員、曾田委員、津山委員、山谷委員、太田氏（折茂委員代理）
計 7 名

< 事務局 >

（北海道経済連合会）水野総括部長

（北海道商工会議所連合会）安宅総務担当部長

（北海道）平野政策局長、岩崎北海道 150 年事業準備室長、青山主幹、武藤主査

● 平野政策局長（事務局：北海道）

それでは、時間になりましたので、「北海道 150 年道民検討会議・第 2 回北海道みらいワーキング」を始めさせていただきます。本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。改めまして、政策局の平野でございますが、どうぞよろしく願いいたします。

はじめに事務局を代表いたしまして、山谷北海道副知事からご挨拶を申し上げます。

● 山谷委員（北海道）

お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。前回に続き第 2 回ということであり
ます。

前回、北海道の価値、伝えるべきターゲット、これをしっかりするよということと、それから、単なるイベントに終わるのではなくて、これをきっかけに、いろいろな仕組みづくりも必要ではないか。また、スポーツに着目して、人材育成とか観光客誘致とか、そういうこともできないだろうか。新しいアイデアをみんなで募ってやっていく。それから、プロポーザル方式で道民の方々からいろいろなアイデアを募ってやっていく、そういうことができないだろうか。それから、次の世代、次の世代とばかり言っているけれども、今いる我々がしっかりと輝いて次の世代にそれを伝えていく、そういうことを考えるべきではないだろうかということ。そのようなご意見を様々賜りました。そのようなご意見を踏まえて、事務局で、ああでもない、こうでもないという 1 ヶ月議論をしまして、今日、とりあえずこういう形で方向性というものを整理してみました。これについて、本日ご議論をいただければありがたいと思います。これを踏まえて、基本方針の案というものを固めていきたいなと思っているところです。

それから、「北海道みらい日誌」、作文募集も 390 作品、約 400 近い作品が寄せられました。また、事業アイデアの方も 85 件寄せられたところでもあります。そうした、いろいろな意見を寄せていただいた方々の思いをしっかりと受け止めて、我々の事業の中で形にしていけたらなと思っているところ
ありますので、どうぞ皆様方のご意見を頂戴したいと思います。

また、作文については、次の検討会議で子ども達から発表いただく。皆様に見ていただいて、ひょつとしたら役所とは違う目線で作文を見たときに、「これ面白いじゃないか」、「こういう考え方があってもいいじゃないか」というのがあるのではないかと思いますので、そうした審査方法についても検討を

お願いしたいと思っっているところでもありますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

最終的には10月頃に、この基本方針というのを固めて、道民の方々にお伝えをして、様々な場面での参加ということを広く皆様にお伝えをしていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

小磯座長におかれましては、お忙しい中、本日もどうぞよろしくお願ひいたします。

私からは以上でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

● 平野政策局長（事務局：北海道）

それでは、議事に入る前に、本日の出席状況についてでございますが、大津委員につきましては、15時30分頃に到着する予定でございます。林委員、山崎委員、吉田委員には、都合により欠席となっております。折茂委員につきましては、本日は北海道バスケットボールクラブの太田様が代理でご出席いただいておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、今後の進行につきましては、小磯座長にお願ひしたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

それでは、早速議事の方に入って参りたいと思ひます。かなり慌ただしいスケジュールということで、先ほど副知事の方からもご挨拶がありましたように、10月に向けて、前回の議論でも皆様方の思いとか理念をお伺ひしたのですけれども、どのような形にしていくのかというところが、これから大変難しい作業で、今回、事務局の方でかなり集中的な作業をしていただいたということですので、その辺をお聞きしながら、ご欠席の方もおられますけれども、限られた時間を有効に活用しながらより多くのご意見をいただければと思ひますので、進行へのご協力をよろしくお願ひいたします。

それでは早速議事に入りたいと思ひます。まず、議事の中でございます「150年事業の基本方針素案」、「ロゴマーク及びキャッチフレーズ」、それから「今後の進め方」、この3点について事務局の方から一括して説明をお願ひしたいと思ひます。

● 岩崎北海道150年事業準備室長（事務局：北海道）

事務局の岩崎です。【資料1-1】をご覧ください。北海道150年事業の基本方針素案について説明します。山谷副知事からお話がありましたが、基本方針は、本日の会議でのご議論などを踏まえ、8月上旬に、事務局で原案を取りまとめます。その後、8月末にかけて道民等からの意見募集を行い、その意見を反映した基本方針の案について、改めて幅広いご議論等をいただいた上で、10月頃に取りまとめたいと考えております。

資料の表紙の裏になります。「北海道150年」について触れています。1869年（明治2年）の7月17日、旧暦ではありますが、松浦武四郎が「北加伊道」を含む名称を政府に提案された史実を掲げております。いわば北海道の名付け親である松浦武四郎さんを、北海道150年事業のキーパーソンとする旨を記載しております。このページの下で、この基本方針について解説しています。2018年（平成30年）に行う北海道150年事業の検討・実施に当たっての考え方や枠組みをまとめるものであることや、道民の皆様などに対して、本事業への理解と参加をいただけるよう留意して作成する旨、記載しています。

1ページ、本編に入ります。基本的な考え方の「基本理念」です。前回の会議でのご意見を踏まえ、後段部分を加えております。「道民一人ひとりが、新しい北海道を自分達の方でつくっていく気概を持

つこと」「北海道の新しい価値そして真の価値を共有して、国内外に発信して、文化や経済など様々な交流を広げていく」こととしています。

また、テーマとして3つ掲げております。世界への発信を意識すべきといったご意見を踏まえ、3点目は、「“Hokkaido”の多様な魅力を世界に広げる」としています。

基本姿勢として3つ掲げております。このうち、「道民一体」の説明については、道民検討会議でのご意見を踏まえ、多くの道民などの参加によって、北海道全体を盛り上げることとしています。

150年事業のキャッチフレーズは、前回、「北海道の新たなキャッチフレーズ」を候補としてお示ししました。委員からは、「150年事業であることをもっと明確にすべき」とのご意見や、「ロゴマークとの組合せでその点は担保できるのではないか」といったご意見をいただきました。

これを踏まえ、この素案では、前回同様のキャッチフレーズを記載しておりますが、150年事業としてのPRやインパクトの確保といった点については、ロゴマークと組み合わせる方法を考えています。後ほど【資料3】で説明しますので、そこで、ご審議をいただきたいと思えます。

次に2ページ、事業の概要についてです。(1)で事業の構成を記載しています。前回の会議でご指摘をいただきました。「事業」という表現には、取り組み全体である「150年事業」を指す場合と、「個別の事業」を指す場合があります。この点の整理が必要等といったご指摘でした。

今回、150年事業を、コア事業、連携事業、継続事業及びPR事業の4つに整理し、その下に個々の事業、個別事業が展開されることを図で表しています。

事業の実施期間についてです。前回、節目に当たる平成30年1月から12月までを基本としつつも、この時期を超えて行う取組についても対象としてはどうかのご意見をいただきました。ご意見を踏まえ、実施時期が平成31年以降に及ぶことが見込まれる施策についても、検討対象とすることとしております。

事業の展開エリアは、道内のほか道外での実施も想定しております。実施効果としては、広く波及させることを記載しています。

事業の概要です。2ページの図で示した4つの事業についての説明です。3ページ、まず、コア事業についてですが、北海道150年を象徴するものとして、記念セレモニーなどを実行委員会が実施します。セレモニーに関しては、いただいたご意見を踏まえまして、一過性のイベントを実施するのではなく、例えば、準備段階も含めた取組の意義や効果について精査を行い、理念や精神が後年にしっかりと受け継がれるようなものに絞って実施することが大切と考えています。

セレモニー的な事業を実施する場合についてですが、例えば、夏頃の特定の日に行うことを想定しています。事業費は、寄附やクラウドファンディングのほか、構成メンバーの負担金など実行委員会予算を充てることを想定しています。

囲みの中で、個別事業の例を記載しております。事業内容は、各実施主体において検討がなされることとなります。例えば、このコア事業については、実行委員会が検討を行います。皆様に事業のイメージをもっていただくため、例として記載しておりますが、事業の適否や関連予算等の検討はこれからとなりますのでご留意願います。

この場で、個別事業についてもご意見をぜひいただきたいと思えます。まず、記念セレモニー事業についてですが、事業を構成する企画として、道民検討会議でのご意見等も踏まえ、アイヌの音楽や舞踏の披露、お祭り、うたの制作や披露などを検討しております。また、フォーラムやシンポジウム等の開催として、未来をテーマにしたものや、松浦武四郎の足跡やアイヌ文化にちなんだ事業について記載しております。

また、プロポーザル型道民事業とありますが、全道各地で様々な主体が提案する事業を実行委員会が支援する取組についても検討を行っております。

「北海道」の見つめ直しと継承として、例えば「人」に着目した取組として、偉人と現在活躍されている方々の選定などを行ってはどうかといった検討を行っております。150 人を選定するといった視点もあるのかなと考えております。

「バーチャル道民」というのは、すでに民間企業において進められている取組に関係するキーワードです。SNSなどインターネットを通じて、北海道とつながり、応援してくれるフォロワーとの交流を深める事業について、何か関連する取組ができないものかという視点で、今後検討を行っていきます。

4 ページ、連携事業です。実行委員会以外の様々な主体の皆様が実施する事業です。複数の実施主体の連携も考えられます。具体的実施主体としては、道民、道、市町村、国の出先機関、関係団体及び民間企業などを想定しています。また、事業計画案の概要の分かるものを実行委員会に届け出て、登録されれば、ロゴマークを使用できる、簡便な仕組みをつくりたいと思います。

個別事業の例として、松浦武四郎に関連した事業とありますが、北海道博物館において特別展の企画が進められており、これを踏まえた事業や、2018 年は松浦武四郎さんの生誕 200 年に当たり、三重県松阪市にあります武四郎記念館との記念事業についての予定をみながら、これに関連した交流事業を検討できないかといった視点で記載しています。

アイヌ文化の発信に関して、第 1 回道民検討会議において、アイヌ文様の T シャツを活用して観光客をお出迎えする事業の提案をいただいております。

また、食・観光の磨き上げ事業として、北海道スイーツ関連事業といった記載があります。例えば、最近の道総研と菓子関係企業との商品開発の動きや、道産 100% プロジェクトが進められている状況等を参考としながら、今後の展開を検討する事項として記載しております。

下の方に「冠事業」として、各種スポーツ事業との記載があります。スポーツ等に関する事業についてのご意見やご提案もお願いしたいと思います。

5 ページ、継続事業についてです。150 年を契機として継続的に取り組むべき施策に関して、道民の皆様からご提案いただいた事案について、道などが取り組むことを想定しています。

個別事業の例については記載のとおりです。時間の関係上、後ほど質疑等の中で必要に応じて説明をしたいと思います。説明を前に進めます。

6 ページ、PR 事業についてですが、多くの道民の皆様にも、150 年事業の考え方や取組を知っていただき、共感が広がっていくような展開が求められます。このため、マスメディアと連携して事業を PR するほか、お祭りやスポーツ関連などの大規模なイベントにおける啓発を行います。さらには、SNS を使って情報の受発信をより効果的に行うとともに、発信力のある民間企業等とも連携したいと考えます。平成 29 年 10 月から平成 30 年 3 月の半年間を PR の強化期間とします。

7 ページ、推進体制についてですが、実行委員会の活動内容としては、記載のとおり事業計画の作成等を予定しています。実行委員会は、事業の趣旨に賛同する関係機関や団体、企業の代表者等で構成し、役職については例としてお示ししております。組織体制として、総会の下に幹事会及び部会を設置し、事務局は官民の連携による運営を検討しています。

続きまして、スケジュールについて、【資料 1-2】をご覧ください。10 月に基本方針を策定後、実行委員会が 150 年事業全体の推進を担います。表の左側、実行委員会では、29 年度、30 年度と 2 か年度にわたるコア事業やその他主な個別事業の事業計画案などを取りまとめ、事業の全体像や概要が分かる、いわばガイドブックに当たる情報を作成して PR を行います。現時点の想定ですが、こうした事業計画

等のまとめのタイミングを来年 29 年 3 月及び 9 月に置いています。

次に、道民等意見の把握状況についてですが、【資料 1 - 3】のとおりです。後ほど個別に説明いたします。

一番下の資料ですが、【参考資料】北海道略年表を付けております。現在、道の各部、各機関との調整を行っている段階で作業中のものです。北海道博物館での展示をもとに再構成しております。北海道の歴史を振り返る際に活用できるよう作業を進めていきます。

続きまして、【資料 2】をご覧ください。「アンケート調査の実施状況」について、7 月 15 日現在でまとめています。6 月 11 日から実施しており、85 人からご意見等をいただきました。

調査結果について、実際の回答のフォームに沿って、概要をまとめています。＜次の世代に伝えたいもの＞として、「先住民族アイヌの歴史、アイヌ文化」「北海道の自然環境」「開拓の歴史、先人の労苦や努力、開拓後の産業の移り変わり」などが挙げられています。

また、＜北海道 150 年事業への視点や事業アイデア＞に関してですが、よく用いられていた用語として、「アイヌ文化」「北海道の歴史」「開拓の歴史の発信」「これからの北海道を支える人物を育てる教育」などとなっています。

＜道民検討会議や北海道みらいワーキングへのご意見＞として、「イベント実施は低予算に抑える」「行政主導でやると難しい資料が多い」「事業の効果を一過性のものとしないう、関係者の内輪ごとにならないよう注意すべき」といったご意見をいただいております。今後、留意して取り組みたいと思います。個々のご意見については、後ほどご覧いただければと思います。

【資料 3】をご覧ください。まず、ロゴマークに関してですが、表の②にあるとおり、道では、今後、150 年事業全体の PR 業務に関して、公募型のプロポーザル方式で民間事業者に委託することを検討しています。

委託する業務の範囲に、ロゴマークの作成業務を含める予定です。民間事業者からは、ロゴマークのデザインや作成の方法について提案していただき、優れた提案を採用し、実行に移します。

①には、ロゴマークのデザインについての主な考え方の案を記載しています。デザインに「150」との表記を取り入れること、そして、ロゴマークとキャッチフレーズを一体で使用した場合の図案を重視することの二点です。

キャッチフレーズについては、この素案では「北海道の新たなキャッチフレーズ」を使うことを記載しています。繰り返しになりますが、事務局としては、「使用例（イメージ）」にあるとおり、ロゴマークとキャッチフレーズを組み合わせることで、150 年事業の PR を効果的に行うことが期待できると考えています。こうした考え方も含めまして、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。

なお、キャッチフレーズそのものについても、例えば、「別の案とすべき」「改めて公募すべき」などのご意見、ご提案がありましたら、ぜひいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

【資料 4】をご覧ください。前回の資料でお配りしたのものから、進め方、手順について、大きな変更点はありません。なお、当初は、本日の会議において、作文「北海道みらい日誌」の最終審査まで行う予定としていましたが、審査時間を確保するため、当初予定よりやや後ろ倒しとなっております。この点、後ほど説明します。

説明が長くなりましたが、以上です。

● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

どうもご説明ありがとうございました。多岐にわたる資料説明ということで、皆さん整理するのが大

変かと思えますけれども、まず各委員の皆さんから、今ご説明がございました、基本方針の素案ですね、それからロゴマーク、キャッチフレーズ、特にその辺についてご意見をまず順番にお伺いする形で進めて行きたいと思えます。もし、後で思いつくことがあればまたいただければと思えます。

とりあえず、河崎委員の方からご発言をお願いできますでしょうか。

● 河崎委員（作家）

河崎です。よろしくお願いいたします。

今、ひととおりの説明を伺いまして、以前の会議から改めて意見がさらにまとまって洗練されて決まったこと、または継続してこれからさらに議論を煮詰めて行かなければならないことなど、いろいろあるかと思うのですが、具体的に今後の事業の概要としまして、中核事業、連携事業、継続事業ということで3本の柱がまとまっているわけなのですが、今、改めて資料の内容を伺って、いろいろ思ったりしたことなのではございますけれども、改めて今回の150年事業というものが、道民それぞれのいろいろな人たちが参加する、道民のいろいろな人を巻き込むということが理想であるということを確認していただけたのがまず個人的に良かったなと思うのがひとつ。と言いますのは、150年の事業ということで、どうしても主体は例えば北海道が主体になっていろいろ考えていって、民間の人も入ってきてということなのではございますけれども、どうしても札幌寄りの特定の地域ですとか、あえて言葉を選ばずに言えば、特定の階層といった人たちが主体になって、あとの人たちは置いてきぼり、「なんか札幌の方でイベントやるわ。俺らは関係ねえや」というような状態になってしまうのが、一番危惧すべきことだと思いますので、そういったことがないようにというふうに確認していただけたのがまず良かったなと個人的に感じたところです。

その中で、それぞれのいろいろな立場の人たちが関わっていくということで、その視点のまずひとつとして、スポーツイベントですとか、食のイベントですとか、インターネットですとか、例えばそういったものは、その柱に興味がない人というのはなかなか立ち入っていけない分野なのですよね。食に全然関心がない人とか、スポーツに全然関心がない人、例えばスポーツを観るのは好きだけれども、スポーツをやる習慣がない人なんかだと、例えばスポーツだけに視点を当てて事業を展開していくと、その人は完全に弾かれてしまうわけなのですよね。このため、そういった、例えば食があったり、スポーツがあったり、歴史事業があったりとか、そういった柱が何本かあるというのが理想ですと、今ご説明を伺って、ああそうだなと思っていましたところ。

例えば、今回、ロゴマークの素案、「150」という文字を入れるですとか、北海道の形を入れる、あとはこの間決まりましたキャッチフレーズが入るといふいうふうにあったのですが、単なる思いつきとしてなのではございますけれども、スポーツイベントと絡めまして、北海道マラソンって毎年8月にありますよね。毎年だんだん参加者が増えてきて、今は1万人オーバーでしたでしょうか。毎年、高橋はるみ知事がスタートで、パーンとスタートの合図をされるものとして有名なものではございますけれども、結構走る人たちもそうなのではございますけれども、応援する家族ですとか、それ以外の方でも応援しに行くということが大きなイベントとして、札幌では定着しつつあるという印象があるのですよね。例えば、参加パンフレットの一部に150年のイベントも兼ねていますよ、というようなそういった参画の仕方があるかなというふうに思えます。平成30年は2年後ですか、北海道マラソンが何回目かは忘れてしまったのですが、例えば参加Tシャツ、参加する全員だと1万枚以上になりますよね。必ず毎年変わるロゴマークというのが胸とか腕とかにプリントされるのですが、例えばそれが全面ではなくても、今回の事業のロゴマークが袖に入るとか、そういっただけで、参加者にとっては必ず目にするものでありますし、例えば、マ

ラソン大会が終わった後でも、参加者というのは大抵そのTシャツを着て、練習とか他の大会に出るわけですね。いろいろな人の目につくということも考えられるかなと思います。というのは、150年事業とマスコミや新聞で言っている、マスコミ・新聞を見ない人って、結構いるのですよね。そういった人達に、何だろうというふうにまず目視でもって視界に入るという意味では、北海道マラソンに限らず、スポーツイベントに限らず参加型のイベントに、あえて言ってしまうと、お金のかからない形でロゴを入れてもらうとか、そういった情報を入れてもらうとか、いざ平成30年の150年記念のときにちょっとした協賛するイベントを挟み込むですとか、各種イベントに挟み込むような形でいろいろな人に知ってもらい、いろいろな人に参加の一部を担ってもらい、そういった形があるのかなというふうに感じました。

私からは以上です。

● 曾田委員（北海道教育大学岩見沢校）

曾田と申します。よろしくお願ひします。

どういうふうに絞って、捉えてお話ししたらよいのかなと思ったのですが、まず、こちら側（北海道みらいワーキング）の今回のメンバーでいろいろと協議したりアイデアを出したりするものと、上のもうひとつの会議（道民検討会議）でも同じようなことを検討されて、アイデアを出したりして、並行して交わることなく進んでいると思うのですけれども、最終的に、ここで話をして決められることの範囲とか、どう反映されるのかとか、もうひとつの方のグループの意見がどのように反映されて、どちらが優位なのかということも今のところ掴めていないというのがひとつあるので、同じような意見で吸収しあえることがあればもちろんよいと思うのですけれども、そうじゃない意見が出たときに、どのように反映されるのかというのが、全部が吸収して反映するのは無理というのは分かりつつも、その辺がはっきりするといいのかなというふうに思っているところです。内容とは別なのですが。

今回のメンバーも、お声がけを頂いてという形だったと思うのですけれども、誰が決めたんだろうという意味で言いますと、道庁さんの中のどなたかがグループで調査して「この人がよいのではないか」ということで決めていただいたような感じなのだろうなと思ったのですが、プロポーザル方式で民間からデザイン案とか事業案というのを出してもらったときに、それが「いいアイデアだよ」とか「いいデザインだよ」ということを決めるのもこのメンバーだと考えてよいのでしょうか。それとも、道庁さんの中のメンバーで決めるのかなと。結局、外出しするに当たって、北海道のイメージが北海道全体に広がるのと、道外事業とか海外事業とか、もし少なくとも外展開をやるとしたときのデザインの統一とか、質が低いよりも高い方がよいと思うのですけれども、デザインの質の高さというのなかなか数値化できない部分もありますし、どこかに丸投げしてひとつのところに任せるわけにもいかないというのも当然思うのですけれども、そのあたりの、民間企業さんの協力を得るといことは素晴らしいと思うのですけれども、せっかく協力いただくのでしたら、道内企業さんでもデザインチームでも、道外とか海外の仕事で非常に洗練された仕事をされている方がいますけれども、でも道内需要がなかったりというデザインチームもいますし、いろいろある中、この選別というのをどういうふうにしていくのかなというの、人選と同じように企業を選ぶにあたって、「なるほど、だったら、こういうふう基準があるならお任せしよう」というふうに皆さんでなればよいなと思ったのがひとつあります。

それから、スポーツに関してとか食に関してとか教育に関してというのが、自分の専門では多少あるのですけれども、僕も北海道マラソンさんの役割をちょっといただいて何年か経つのですけれども、たいしたことはやっていなくて、ただイベントとして役割をいただいているのですけれども、そろそろ、

昨年から短い距離ですね、今年増えてきて、今年は車いすの方のコースもできて、参加者の数を増やすような仕組みを北海道マラソンさんとしてされていると思うのですが、せっかくそういうふうに拡大していく大きなスポーツイベントがあるので、道内でもうまく資質というか能力を活用する可能性があるかなと思って少しお話していることがありまして、例えば、北海道マラソンが8月の末でしょうか、そこに向けて、道内の全部の小学校・中学校でランニングのログを付ける。例えば、1ヶ月前からそれをスタートして、校庭に300mの線だけ先生に引いてもらって、朝、いつもより30分早く起きてみんなでランニングしようプロジェクトとか、昔は何かそういうものを小学校とやっていたところもあると思うのですが、全道でやって、スタンプとか判子みたいのを1周走ったら1個押せるというふうにして、個人でペースがまちまちでも構わないと思うのですが、最初に達成した人から10人くらいは北海道マラソンの本選で走る権利を得るとか、地方それぞれで頑張っていること、努力していることの発表会みたいな大会であるとか、そのときに僕が話していたのは、先生も朝早く起きると大変だろうということもあるのですが、町内会の見直しにもなるのかなと思っています。町内会の高齢者の方々に一緒にウォーキングをしていただくというプランにして、高齢者の方と子ども達と一緒にグラウンドで走ることを、歩く高齢者方でエクササイズを共にしながら、町内会のお子さん達にどんな子がいるのかなとか、昔ながらのコミュニケーションがそこで生まれてもいいような、そういう仕組みも面白いかなと思っています。

また、ファイターズさんも、コンサドーレさんも、レバンガさんも、地方でのスポーツ教室とかスクール展開をされていると思うので、既存の広がりをつくっている団体さんにうまく乗るというのもひとつ拡散しやすい方法かなと思いますし、僕は、A-bankという団体もやっているのですが、道内で様々な活動をさせていただいていますので、そんなに工夫せずとも協力してもらえそうな団体もあるかなというのも同時に思いました。

僕、前回もチラっとお話ししたかもしれませんが、北海道の今の魅力は、とにかく季節とか環境を活用した観光の部分と、美味しい食べ物の一次産業という部分だと思うので、特に一次産業を活用した食育というのは、このタイミングで、皆さんそれぞれやっていると思うのですよね。僕も食育は多少やっていますけれども、いろいろな形の食育って全国的にも大事だ、大事だと言っているのですが、北海道の食育について、一本化しなくてもよいのですが、ひとつの軸があってもよいような気がします。北海道の食の捉え方という軸をつくってもよいのかなと個人的に考えたりしていました。

● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

最初に曾田委員がおっしゃられた部分というのは、このワーキングの役割ですね。どこまで関わっていけばよいのか。質問的な部分と問題提起的なところがあって、それは最後に事務局の方でお考えがあればお聞かせいただければと思います。

● 津山委員（木古内公益振興社）

津山と申します。よろしくお願いたします。

私も、先ほど河崎委員がおっしゃっていた、札幌圏だけじゃなく、いろいろな地域で北海道150年を迎えられるような感じになってきているというのが、私も、とても嬉しいというかワクワクした気持ちになってきておりまして、実際に、今回私がこの委員に任命していただいたことで、私のいる木古内町の人達は、初めて北海道がもうすぐ150年を迎えるということを知りまして、ちょっと盛り上がり過ぎちゃいまして、今、ロゴマークとかキャッチフレーズとかプロポーザルで作って出していくという話が

あったところでお恥ずかしいのですが、うちの道の駅でこういうお土産品を入れる紙袋を、木古内弁を使ったデザインのものを使っているのですけれども、まず木古内の方言だけではなく、木古内は北海道新幹線が開業して、北海道の玄関口になった町ということで、北海道をPRしてもらえるようなツールが欲しいなということで、こういうデザインの紙袋にしたのですね。その中に、私がチャラッと描いたこの「2018年北海道150年」というのをに入れて、せっかくだったらデザインを一新しちゃおうよということで、さらにですね、先ほどお話がありましたTシャツも作ることになりまして、今製作中でございます。木古内は小さい町なので、一人がそういう話を持ってくると、町全体で盛り上がりちゃうとか、先走り過ぎちゃうところもあるのですけれども、こういう感じで勝手に盛り上がりかけているのですが、このハートを描くときに、本当は星マークもいいなと思ったのですよ。北海道の星は綺麗だし。星を私が上手に画けなくてなくてハートになっちゃったのですけれども、例えば、星、北海道という星、サッポロビールさんも星マーク、北海道の一番星をいっぱいみつけられたら面白いかなと思ったのですよね。前回、北海道の価値を伝えるキーパーソン150人を選定というのはすごくいいなと思ったのです。でも、150人一人ひとりにその役目とかお仕事任せちゃうとどうなのだろうかと。せっかくだったら、北海道は広いので、地域で、例えば私のいる道南であれば、青森、本州に一番近い地域だよということで、青函連携のイベントとか、イベントもやればよいというものではないのですけれども、やはり北海道新幹線が開業したときに思ったのですけれども、イベントをみんなで汗をかいてやると思い出に残るのですよね。それが成功だったとか、よくイベントは打ち上げ花火で終わっちゃって後々意味をなさないのではないかという意見もいろいろ聞くのですが、やっぱりみんなで何かひとつのことを成し遂げるといえるのは、すごく思い出に残るし、連携が深まるなど感じたので、例えば地域、北海道は広いので振興局単位がよいのでしょうか、私勉強不足でわからないのですが、例えば、食で、ここが一番何々を、ラーメンを食べている地域だよとか。すいません、適当に言っているのですが、そういう北海道の一番星を、150個はちょっと多すぎるので、15個とか、いろいろ見つけて、そういうのを、150年を記念して北海道全体を見直して、さらに地域で自分達の地域は何が一番かなというのを見直して、次の時代に繋がれたら面白いなと思っていたところでございます。

● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

どうもありがとうございました。もう既に150年事業を実践していらっしゃる。まさに、このような取組の積み重ねが150年事業になっていけばと、そういう意味では一番先端で実践しておられるなという思いをいたしました。ありがとうございました。

● 太田様（北海道バスケットボールクラブ）※折茂委員代理

すいません。折茂の代理は務まらないのですけれども、北海道バスケットボールクラブの太田と申します。よろしく願いいたします。

こんなところで発言する立場ではないのですが、スポーツビジネスに関わっている身として1点だけ。平成30年を迎える前の段階、ですから来年ということになるのでしょうか。例えば、ファイターズさんもそうですし、コンサドーレさんもそうですし、私どももそうですし、フットサルのエスポラーダさんもそうですし、みんな北海道の名前を背負っていますので、今季、コンサドーレさんは北海道のマークをつけて戦っていますけれども、このロゴマークを各チームがみんな背負って来年度これをPRするというようなことはできないのかなと。私どもの会場でもそうですし、ファイターズさん、コンサドーレさんもそうですけれども、いろいろと試合会場の中でPRですとか、イベントごとをたくさん毎試合

やっていますけれども、例えば、150年事業の一環として、例えば来年1年間、我々は冬やっているシーズンですし、ファイターズさん、コンサドーレさんは春から秋にかけてということで、ちょうど1年間、なにがしかのスポーツは行われていることとなりますので、この記念セレモニー事業の中にある、例えばアイヌの音楽だとか、そういったものを特化して、必ずどこかの試合でPRされているですとか、各チームとも本州の方に必ず遠征に行つて試合をしてきますので、そういう時に、150年記念のロゴマークを背負っている、例えば、道庁さんが主導でもよいのですけれども、そこにPRブースがあつて、北海道150年というのを全国でPRして平成30年に向けて、全国で盛り上げて、日本全国から呼んでしまふとか、スポーツイベントとしてお手伝いできることというのは、我々スポーツチームにもあるのかなというふうに思いました。

● 大津委員（小樽商科大学）

たった今、授業を終えて飛んできたところです。

私は、実は前回の、第1回の議論の中で、この「バーチャル道民」というのですかね、要は、今北海道に暮らしていらっしゃる方達が主役であるには違いないけれども、バーチャルという言葉の使い方は、やや言葉の工夫をする余地があるかなと思います。北海道民、あるいは北海道に何らかの思いであるとか、原点であるとか、アイデンティティみたいなものを持っている方をどう巻き込むのかということについて、個人的には強く関心を持ったところでして、これは、単純に寄附を募つてということではなくて、自分達の北海道の外にいても、場合によっては国外にいても、何か自分に繋がるものを持っている方々が、当事者、自分達事として当事者意識を持てるような仕掛けが必要なのだろうなど。でなければ、前回もそんな議論があつたかと思いますが、北海道の中だけで内々に盛り上がつているというものであつては残念だなと強く思つておりました。そういう意味では、当然このインターネットというのはひとつのツールになってくるとは思いますが、ここにいろいろな工夫を施していくことが必要なかなと感じているところです。今申し上げたように、バーチャルというところをどんなふうに表現するかは工夫しつつ、かつ今後そういう方々を増やしてくということが必要かと思つておりました。そういう意味では、これから先の北海道、何らかの縁のある方達が、世界で、日本国中で活躍していけるような、そんな種まきみたいなものが、中核事業の中に入れていただきたいなど、抽象的で恐縮ですが、そんなことを前回以降、ぼんやりと考へていたところです。

あとは、この後、議論、議事が進んでいくのかもしれませんが、みらい日誌の審査に携わらせていただきまして、たまたまこの週末、直近で拝見していたので、それが結構頭に残っているのですが、恐らく、高校生の作文が多かつたのかなと思うのですけれども、やはり高校生たちの、ひとつは地域に対する思いの中に、自然というのが、繰り返しになるかもしれないけれども、強く残つていて、これを大切にしたいというのが、ほとんどの高校生たちに残っている。これは、当たり前のように見えて、すごく大切なことだろうと。ただ、150年という節目で、自然ですとか環境に対して、どんな捉え直し方ができるのか、何か大きな問題提起はやはり必要なのではないかなと。当たり前のようにある環境、与えられたものでずっと続いていくもの考えると、どちらかというと受動的になってしまうので、そこは前向きに環境というものに自分達で関わつていく、能動的に「活用」という言葉がいいかどうか分かりませんが、そういうことが必要なかなと思つたところです。

それから、やはり人口が減つていくということに対して、強い危機意識といか、ネガティブな受け止め方をされている、これが多かつたように思うのですけれども、これはある意味では、今後人口が大きく増加していく局面というのは想定しづらい。前回、第1回の議論の中でも、50年前つまり北海道100

年の時は、経済が成長していて人口も増えている局面だったはずですので、大きく局面が変わっていく中、つまり人口が減りながらも、しかし豊かな未来を創造できるような、ビジョンとして持てるような何かそういうメッセージを強く発していかなければ、危機意識を持つことは重要だと思うのですが、漠然とした不安感とか、北海道がどんどん暮らしぶらなくなっていく、ただただそんなことだけを若い世代がイメージをしたままにしているというのは、結果として「みらい」日誌という言葉だけでも、夢よりもどちらかという向き合っている現実の中で、このままでは北海道の元気がなくなっていくのではないかという不安感が滲んでいた、そんなふうを感じまして、表彰対象としてどうこういう評価とは別の次元ですけども、全体を通して、そんな印象を強く持ちました。そういう意味では、人口や経済の縮小みたいなものを前向きに捉えながら、もしくは考え方を変えながら、次の50年は、違う幸福感、幸福度みたいなものを、そういったインデックスをしっかりと見せていく。国内のいろいろな自治体が、いわゆる経済的な指標だけではないその地域における独自の幸福度指標みたいなものを設計して、暮らしやすさ、もしくは生活者の観点の地域の幸福度指標というものを設定・提案している。ですから、これを機に、北海道の暮らしやすさをはっきりと意識できるような物差しを見せていくということが必要だなと、特にみらい日誌の選考をしている中で強く感じたところがございます。感想めいた内容で恐縮ですが、以上でございます。

● 山谷委員（北海道）

最初に進め方等について曾田委員からご質問があった事項であります。こうこう絵（資料4）にしちゃうと、カキンカキンカキンと誰かが決めるみたいに見えるかもしれませんが、この検討会議の方は、大枠として、ある意味経済界も含めてオーソライズをして各産業界それぞれの分野のみなさんに浸透を図っていただく、そういう意味合いも込めての検討会議として設置しております。そうした中で、具体的にどういうことを考えるのか。といった時に、まさにこのみらいワーキングで具体のいろいろなことを考えて、ここで煮詰めて、それを検討会議に持ち込み、検討会議の方でもし何か注文があれば、このみらいワーキングにフィードバックをして、みらいワーキングの方でさらにそれを練り上げて検討会議に反映していく形で進めていきたいと思っております。まさにこのみらいワーキングでご議論いただいたことが基本方針なり事業計画という形で固まっていく、その中核的な役割をこの会議が担っていただいている。検討会議との繋ぎは、小磯先生に両方引き受けていただいて、みらいワーキングでこういう議論がありましたということもご報告いただいて、進めていきたいと思っております。それから、これは僕らもまだ議論していないのだけれども、皆さん逃げられませんので。この後実行委員会ができあがってきて、いろいろな分野でいろいろな事業を興していくときに、もっと多くの人々に関わっていただいてやっていく。まさにそのときの中核メンバーとして、先ほどスポーツの関係で、僕はレバンガさんがそれぞれ試合をやるときに、道内の物産を持って行ってそれを販売いただいたりしているというのを折茂さんから最初に聞いたときに、実は道の事業としてご支援できないかなと思ったのですが、当時農政部と話をしても、もう一つノリが悪かった。でもそれも、正直言うと、この150年事業で、他のスポーツチームもみなさん同じようにして参加いただいて、「これが北海道のスポーツチームなんだぞ」というので全国に行っていただく、そういう仕組みがこの150年の中で作れたら有り難いなというふうにも思っていますので、そういうものを進めていくときのまさに中核として、いろいろなチームに声かけするというのもお願いをさせていただき、レバンガでこういうふうに行っていてうまくいっているんだよ、というのも先行事例としてお伝えして、他のチームにもそういうのを引き受けていただく、そういうことができればなと思っております。

それから、ロゴ等の採択の関係でもありますが、言われてみるとそうだなと。通常の入札方式でいくと、実は入札の決まった方式があるので、道の中で職員が委員会を作ってやらなければいけないのですが、何かもう一工夫、何か事務局として考えて、皆さんにも審査の中にご参加いただいて、見ていただける、そんな仕組みもこれから工夫をしていきたいなと思っているところであります。

そもそも、曾田さんには、オリンピックの子供たち、親と子のスポーツ教室というのをお願いして、そのときにいろいろな活動をしているお話も聞いています。子ども達のこれからの方向をみて、頑張れよと背中を押してやる。それこそ、あのとき、膝も痛めてボールも蹴れなくなっているけれども、子ども達にボールをこうやって扱うのだよと見せていただいたりとか、まさにそういう姿で子ども達に力を与えるということを、「みんなで走るプロジェクト」とか地域のおじさん達とか、スポーツ選手達にお願いをしたいと思っています。総合教育を検討している中で、コミュニティスクールというのを道として打ち出しています。これは、学校が学校だけで活動するのではなくて、地域の大人達がみんな関わって、町内会での声かけも含めて、家庭の中に関わるというのは実は難しい話なのですが、学校で学んでいる友達の親としてそれぞれの家庭の目配りもできるだろうと。コミュニティスクールというのを積極的に推進しようとしているところなのです。まさに「みんなで走るプロジェクト」とかですね、こういうのって150年を契機に進めていけると、学校づくりってコミュニティづくりなんだっていうのを、もう一つ私たちが進めていきたい、そういうのに繋がるなと思っているので、こういうことをこの委員会を通じてご提起いただいて、私どもと一緒にやっていただければと思っているところでありますので、今日は私、さっきから大変嬉しく聞いておりました。

● 小磯座長（北海道大学）

ありがとうございました。一応、各委員の方からご意見をいただきました。

全体のまとめということにはなりませんけれども、少し確認のための理解という意味で整理します。最初に河崎さんの方からうまくまとめていただいたのですけれども、この取組の大事なコンセプトというのは、道民をしっかりと巻き込んで取り組んでいく事業であると。実行委員会というのは置くのですけれども、実行委員会が主体だという意識になるべくならないように、いかに北海道民をしっかりと巻き込んでいくかというところ、これが非常に大事なところで、今そこをしっかりと共有していく、議論していくことが改めて必要なと思います。もうひとつは、これは河崎さんに加えて、津山さんもさっきおっしゃられましたけれども、いろいろ各地域で、地域の広がりの中で、やっぱり多くの地域の中でこの取組は進んでいくという、そこは、今札幌で北海道庁の皆さんが事務局で議論していますけれども、無意識のうちに、ややもするとやっぱり札幌発の取組になってしまうので、そこはかなり自覚しながら意識しないと、ついつい「札幌でなんかやってるな」という先ほどのご発言のような状況になってしまうという懸念があります。そこは、今日ワーキングの皆さんのご意見をお聞きした中で、ワーキングの中でしっかりと確認していきたいなというそういう思いがあります。

それから、もうひとつ大事なことは、私自身の考え方になりますが、先ほど大津委員のご発言の中で、高校生の作文を読んでおられて、やっぱり人口減少、そこでの将来への悲観という部分、この部分に対する取組という中で、この150年事業の意義というのは大きなものがあるのではないかなと思います。それは、隣に山谷副知事がおられますけれども、これまた私はいろいろとお手伝いをさせていただいておまして、地方創生という、人口減少時代にいかに地域が生き抜くのかという国からの大変厳しい命題の中で、北海道庁は比較的早く将来の人口の予測をしっかりと見据えて、政策議論ということで私も実はお手伝いしたのです。その中で、そこでは2060年というほぼ50年後、いわゆる（北海道）200年

というところを見据えた議論が北海道の中ですでに展開されていて、全国でも人口減少に向かって、真剣な議論が始まっている。その議論の中で、地方創生の関係では、道庁だけではなくて、いろいろな地方のお手伝いをしているのですけれども、一言で言うと、人が減る、人口が減少すると経済の活動も縮小していく、それによって結果的に消費も投資も減少して、結果的にどんどん先行きの不安というのが高まってくる。それによって、将来に向けて消費をしよう、あるいは投資をしようと思っても、やめておいて貯蓄しようとか投資を控えようかという気持ちの萎縮、それが結果的に地域の経済活動を萎縮させてしまうという悪循環が起こってくる。そのことを如何に断ち切るかというのがこれからの50年後、人口減少という時代に我々地方が生き抜いていく一番大事なことです。そういう人口減少に対する悲観的な気持ちではなくて、前向きな挑戦に気持ちを持っていく、そういうきっかけに、この150年事業を位置づけていくんだという理解と理念と我々の共有感、そういうものが150年事業の中にひとつ筋があると意外にいろいろこれから発信してPRとかかされている中でも、理解が深まっていき、結果的に道民をしっかり巻き込み、いろいろな地域を巻き込んでいく、そういう取組になるんじゃないかなということを感じましたので、一応お話をさせていただきました。

次は、私個人の委員としての意見です。実は、今回の基本方針の素案の中の一番中核になる部分は、事業の構成、コア事業、連携事業、継続事業というこの部分ではないかなというふうに思います。この中で少し気になるのが、実行委員会が主体的に取り組まれるセレモニー、あとプロポーザル型の道民事業を中核（コア）事業と位置づけておられます。実行委員会が責任をもってやるという意味では中核（コア）かもしれませんが、今私が申し上げたような理念を具体化していくと、全道各地で様々な主体が実施していく事業、これが中核事業であって、実行委員会が担う部分は例えば記念セレモニーでもいいと思うのです。象徴的なセレモニーというのは、実行委員会が責任を持って担っていきますと。ただ、連携事業とありますけど、実は「連携」という言葉は、大変難しい言葉であり中途半端な言葉であり、誰がやってくれるのだろうかということが見えなくなり、やや逃げの言葉でもある。全道各地で推進される、推進事業でもよいと思いますけれども、多様な主体が、この部分が北海道150年事業の中核、中心にあるというようなメッセージの方がいろいろな方達が見てですね、実行委員会がやってくれるんだな、ではなくてですね、自分達が何かできるかなという主体的な問題意識に繋がっていくのではないかなと。その事業の中に、右の方に継続事業というのがありますけれども、その中に継続される事業もあれば、集約的に、集中的にやれる事業もあると。だから、継続事業と連携事業というのは比較されるような置き方ではなくて、事業のひとつの性格として分類されていってもよいのではないかなということを感じました。基本的な整理に関わる部分なので、発言していかどうか迷ったのですが、やはり、せつかくの今日のワーキングの議論の中なので、あくまで問題提起という形で受け止めていただければと思います。そういう中で、次に、中核（コア）事業の中で、実行委員会、3ページですけれども、個別事業の例を挙げておられて、そこでセレモニー事業、これも大事だと思うのです。象徴的な記念事業をどういう形で進めて行くのか。これはこれだけで、少し独立されて整理された方がいいんじゃないかなと。プロポーザル型道民事業という、これは非常に大事な部分で、様々な全道各地における提案に対して、どういう形で北海道が支援していけるのか。これは、先ほどの全体事業の構成の中のそれぞれの推進事業に関わる大事な支援手法という形で、これは事業というよりは、事業を進めていくための方法論であって手法なものですから、そこは少し再整理されても良いのではないかなというふうに思いました。あとは個別の事業のアイデアということで、これは大津委員の方からもお話があったのですが、これから取り組む事業の中で、インターネットを含むICT、これを如何に活用していくかというのはすごく大事な分野であると私は思います。ここでは、バーチャル道民の関連事業というところだけ紹介されてい

るのですけれども、これから北海道が大事な取組としては、これは私自身のこれまでの活動の経験の中でも、北海道にいろいろな思いを持って関わっている方というのは、全国、世界にいるのです。そういう方々をこの機会にネットワーク化して、北海道の地域の力として活用していくというような、そういうものは、今のインターネットでありICTの技術をうまく活用すれば、私は取組ができるのではないかなと思います。少し個人的な経験をお話すると、私は地域開発政策というのが専門で、海外での途上国の経済協力とか、そういう活動に関わっています。そういう中で、北海道というのは地域開発政策の非常に伝統のある地域なので、ご存じかどうかわかりませんが、日本のODAの部門の中では、地域開発政策に関する研修は北海道のJICAの札幌事務所が担っています。そこで私が関わっただけでも1,000人近い途上国、海外からの研修生が北海道で学んでいる。その方達と私はフォローアップということで海外でお会いする機会があるのですけれども、彼らは行くと必ず自分のオフィスに北海道のファイルと日本のファイルを持っていて、彼の地に行くと、仕事場に行くと、北海道のことは俺に聞けみたいな、そういう方達がいるのです。1ヶ月とか2ヶ月くらいの研修ではあるのですが、そういう思いを持った方達がこの地球上にいるというのは北海道にとって素晴らしい財産で、仮にそういうものをネットワーク化して力にすることができれば、それだけでも大変大事な事業として取り組んでいけるのではないかなということで、これは少し個別のアイデアということで。あとは本当に細かいところなのですが、ちょっと気になったところを申し上げます。1ページ目、基本理念のところ、ここで後段、少し文章を追加されましたけれども、最後の段落の2行目、「北海道の新しい価値、真の価値を共有し」とあるのですが、「真の価値」という言葉は、なかなかこれは「真の価値」とは何かと。例えば、「北海道の新しい、誇るべき価値を共有し」というような、「誇るべき」というのは、実は、150年を振り返りながら、改めて北海道を見つめ直し、そこでの新たな北海道への理解というか、そういう表現にされたらどうかと感じました。それから、あともう1点だけ。4ページ目。個別事業の中で、「●北海道の見つめ直しと継承、文化・芸術等の発信」の3番目に「北海道政策史の検証」というのがあります。これは私が申し上げて入れていただいたということで感謝申し上げますが、さらに少し正確に申し上げれば、北海道の発展を支えた政策の歴史というものは、これまで整理はされていないので検証の対象がないわけで、検証ではなく北海道の発展を支えた政策という視点での政策史の制作、そんな取組をしてはどうでしょうかと提案したものですから、ちょっと誤解のないようにということで申し上げました。ちょっとお時間とりましたが、以上でございます。

● 小磯座長（北海道大学）

今日、欠席されている吉田委員からご意見がありますので、ご紹介をお願いします。

● 岩崎北海道150年事業準備室長（事務局：北海道）

ご欠席の吉田委員のご意見を紹介します。ご意見は大きな柱として3つございます。

基本方針や、前回の会議でもご議論のありました広報戦略に関して、

- ・ 松浦武四郎をキーパーソンとして設定するのであれば、簡単な紹介動画が効果的であろう。
- ・ 基本理念に「軸」を設定して、それに沿ったストーリーを構築すべきである。例えば「人材」ですとか「誇り」など、各事業はそのストーリーに沿って説明すべきである。
- ・ ロゴマークの作成につきましては、「150」を印象づけるものにするべき。

といった意見をいただいております。

それと、意見や価値の把握に関してご意見をいただいております。

- ・ 事務局を務めております道職員ですとか、道経連、道商連の職員の皆様方の率直な考えやアイデアを聴いてみたい。
- ・ 今後については、今回の作文のように若者だけでなく、各年代から意見を聴取してはどうか。
- ・ 市町村にそれぞれの「価値」を宣言してもらい、それをマップ化してはどうだろうか。
- ・ 金融機関、特に地方の信用金庫には、地域の貴重な情報が集まっていることを改めて認識すべきである。

といったご意見をいただいております。

それと、最後の柱になりますが、事業展開と連携に関してご意見をいただいております。

- ・ 事業は「継続」が大事である。地域に様々な種を根付かせるという意味で、プロポーザル型の道民事業は有効である。
- ・ 一次産業などの生産者に着目した事業があってもよい。
- ・ 道民の多くは企業人であるということで、民間企業、特に中小企業と連携を図って取組を進めるべき。

以上です。

● 小磯座長（北海道大学）

時間の関係もございまして、これまで出たご意見を踏まえて、基本方針の策定につきましては、事務局の方で作業を進めていただくということによろしいでしょうか。

それでは、「北海道みらい日誌」の審査について、ご説明をお願いします。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

【資料 5】をご覧ください。基本方針の検討にあたり、若い世代から「北海道みらい日誌」と題した作文を募集しました。

「北海道の未来への思い」について、「生活・安心」「経済・産業」「人・地域」の 3 つのテーマから 1 つを選んでいただきました。募集期間は、6 月 11 日から 7 月 19 日まで。応募対象は、本年 4 月 1 日現在、道内在住の満 15 歳以上 25 歳以下の方です。募集結果ですが、390 作品の応募がありました。テーマ別では、「人・地域」が一番多く、「生活・安心」がこれに次いでいます。高校生が 382 人と全体の大半を占めておりますが、大学生、社会人からも提出いただきました。

一部の学校からは、授業で北海道の未来についての発表や投票の場を設けるなどして、生徒の皆さんにとって大変心に残る楽しい機会となったとのご報告もいただいております。

募集に当たっては、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、JA グループ北海道様をはじめ、高等学校等の先生や生徒の皆様、親御様からも、ご支援、ご協力を賜りましたことをご報告いたします。

審査状況についてですが、この会議の終了後、第二次審査をさらに進めていただき、各テーマ上位 5 作品を選出します。

その後、太い囲みの部分ですが、最終審査として「みらいワーキング審査」を 7 月 25 日までの予定で進め、各テーマの最優秀作品を選定します。委員の皆様におかれましては、ご審査につきまして、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、各テーマの最優秀賞の方が決定され次第、8 月 8 日の第 2 回道民検討会議でのご本人様からの発表についてお願いする予定です。

以上です。

● **小磯座長（北海道大学）**

ありがとうございました。

ただ今の「北海道みらい日誌」の募集、審査の状況ということですが、これについて何かご質問はございますか。

これは、大津委員と河崎委員が審査に関わっておられるということですが、この後の各委員へのお願いというのは、どういう形で進めるのでしょうか。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

今後またご連絡いたします。

● **小磯座長（北海道大学）**

わかりました。では、この報告はこれでよろしいでしょうか。

それでは、「その他」ということとなりますが、事務局からお願いします。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

【資料6】をご覧ください。大変お忙しい中、委員の皆様にご協力をいただき、このような形で議事録を整理しており、既にホームページでも公開しております。本日の会議も、同じように議事録を作成しますので、内容確認などご対応のほどよろしく願いいたします。

● **小磯座長（北海道大学）**

よろしく願いいたします。それでは、議事は終了しましたので、全体を通しての、かなり限られたスケジュールですので、どなたでも結構ですが、ご意見があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

● **曾田委員（北海道教育大学岩見沢校）**

本当に何気なくなのですが、最近仕事で全道をいろいろ回ったり、他県にも、この1ヶ月ですごい箇所数に行ってきたのですが、先日、富山県と石川県金沢市に行って、金沢市の古い建物のある観光地なのですが、その地域を歩いていたのですね。そうしたら、バス停でバスを待っている小学生と思われる制服を着た女の子がいまして、周りには、日本人だけでなく、外国人もたくさんいて、ぱっと見でも、観光客と思われる外国人の方々がたくさんいました。その観光客の方が、バスに乗ろうと小学生が並んでいる列に並んだのですね。そうすると、その小学生の女の子が、振り返って頭を下げたのですね。ニコッとしながら。要は挨拶をしているのですけれども、僕はびっくりしました。言葉がわからないから、頭を下げているだけなのですからけれども、それを見た瞬間に僕もハッとしましたが、観光客の方もびっくりしていて、それで、「一緒に写真を撮ってくれないか」と、肩を組みながらとか、女性二人組だったのですけれども、写真を撮っていったのですね。

札幌市の場合は、「サッポロスマイル」というロゴを作っていますけれども、学校にどういうふうに言われてしたとか、親にどう言われていたとかは分からないのですけれども、僕は気になったので、「いつもそうしているの？」と聞いたら「はい」と。何気ない話ですけれども、いいなと思って。こういうことは習慣ですし、個人として挨拶するのは、個人的には、マナーというのもありますけれども、したいからするものだと思っていたのですね。来てくれてありがとう、とか、大好きな人に挨拶したくなっちゃ

やうとか。もしかしたら、こういうのが道徳の教材になって、全道で認識してもらったら。地元の人だったら地元で「こんにちは」とは言いますね。でも、札幌から行った人が例えば木古内町に行った時に、木古内町の子供さんたちがそうやって言うてくれたらと言ってくれたら、道内での支援にもなりますし、道外からの観光客だと、ハッピーにならないことは間違いなくないなと思ひまして。そういう浸透というのがそろそろあつても良いかと。外国人だからとか、日本人だからとか差別化もなしにして。そうすると北海道全体で、いつでもどこでも自分は北海道のために何かできている、コミュニケーション能力を上げている、というふうになつたとしたらとても良いなと思ひました。

● **小磯座長（北海道大学）**

ありがとうございます。あとはいかがでしょうか。

● **河崎委員（作家）**

先ほど言おうと思つて言えなかつたことなのですからけれども、継続事業のところでは何気なく書いてある「新北海道史」の後継史の編さんというのがあるのですけれども、どちらが主体でやってらっしゃるのか不勉強でわかりませんが、これは是非実践していただきたいなど。と言ひますのは、50年後の北海道200年の時、北海道の歴史を振り返つた時に、現代の、例えば平成20年代の我々が何を考へて何を事業化したのか、それは先ほど小磯先生がおっしゃつた「北海道政策史の制作」も含めてなのですからけれども、現在の人間がどれだけ試行錯誤してつたかということが、例えば200年の時にもものすごく貴重な資料になるかと思ひますので。こういった北海道史とか地域史の編さんというのは、前の巻と次の巻の間が空きすぎてしまうと、振り返るときにその空白を埋めるのがすごく大変な作業になるかと思ひるので、50年後、何かを調べる人のために、この事業は是非、継続して立派なものにしていただきたいなど、個人的な意見としてお願ひします。

● **小磯座長（北海道大学）**

ありがとうございます。今のご意見には、私も個人的に同感です。
あといかがでしょうか。では、事務局にお返しします。

● **平野政策局長（事務局：北海道）**

小磯座長、どうもありがとうございます。また、委員の皆様からも、貴重なご意見をいただきました。どうもありがとうございます。

今日いただいたご意見を踏まえまして、基本方針の素案の修正をしていきたいと考へております。そして、今度はメール等のやり取りになりますが、皆様方にご確認をいただいた上で、8月8日の道民検討会議の方に報告をさせていただきたいと考へております。

また、ロゴマークとキャッチフレーズですが、ロゴマークにつきましては、公募型プロポーザル方式で行おうと考へておるし、先ほど曾田委員からもお話があつたとおり、ワーキングの方々にも何らかのかたちで関わっていただくように、また、キャッチフレーズについては、既存のものを使つていくのですけれども、そういった時の統合した見せ方というのでしょうか、そういった部分含めて検討を進めていきたいと思つておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

作文については、今後打合せをさせていただきたいと思ひますが、7月25日までというところで、お願ひをしたいと思つておりますので、ご協力につきまして、どうぞよろしくお願ひいたします。

次回のみらいワーキングにつきましては、9月1日の木曜日、15時から17時を予定しておりますので、取り急ぎ、スケジュールの調整についてご配慮いただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は長時間にわたりどうもありがとうございました。引き続きよろしくお願いいたします。

(以 上)